

=====

2024 年度武田知己ゼミナール

「東日本大震災と福島」研究の一年

=====



武田知己（大東文化大学法学部教授）

ttakeda@ic.daito.ac.jp

ゼミ室にて（ゼミ最終日）

2024 年度所属学生：川崎 直輝、前田 篤利（以上、4 年生）

新井 優佳、齋藤 帆伽（以上 3 年生）

はじめに

私は、2004年度（2004年4月1日）に本学に赴任したので、今年度、2024年度は、ちょうど20年目の節目の年でした。2023年度は、在外研究の機会を得て、ポーランドと台湾に行きました。日本に帰国したら、何かしら区切りをつけ、学生と何か新しいことをしようといういろいろな思いを巡らせておりました。

帰国直前に出した答えは、二つでした。一つは、学生と一緒に改めてたくさん本を読むことと政治や歴史を学ぶための手触りをたくさん感じてもらうことでした。もう一つは、沖縄と福島とに焦点を絞ったゼミを、二つ、単年度で持つことでした。

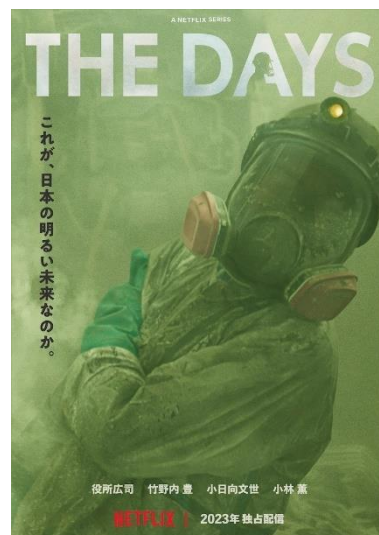
そう考えた理由は、まず、二つの異なる地域にいて、世界中が大きく変わっていることを実感したからにほかなりません（私が何を感じたかは、財団法人櫻田會のウェブサイト（<https://www.sakuradakai.jp/>）にある拙稿「ポーランドだより」「台湾だより」をご覧ください）。在外研究の最後のころ、キャロル・グラックという著名なアメリカの日本研究者が、シンポジウムで、今から数百年ののち、未来の歴史家はこの時代を第二のルネッサンスと呼ぶのではないか、と言ったのを聞いた時、まったくその通りだと思いました（東北大学統合日本学センター開設記念講演、2024年3月5日）。

そのような時代に、私と一緒にゼミで勉強してくれる学生に何を伝えるべきか。私は真剣に考えました。答えは、「基本的知識」と「想像力を養う実感」だろうと思いました。それは、事実を正しく認識するために必要なことです。そして、それが本当に難しいことを、私は日本政治や外交史を学んでいて——日本政治の過ちとして——痛感しています。しかも、私は、本や新聞を毎日読み続ける地道な努力や自説の修正に次ぐ修正（これを「研究」と言います）を通してしか、それは手に入らないと感じました。学生にもその経験をしてほしいと思ったのでした。

そして、もう一つの理由は、私が50代も半ばになり、いろいろなところを飛び回れるのもあと数年だということでした。その間に、「沖縄」と「福島」という、私の40代になってからの新しい研究フィールドについても、自分なりに何らかのまとめをしたいと思ったのです。そして、それらはすべて、大東文化大学の学生とともに始めたプロジェクトでした（これについては、拙稿「アクティブラーニングは政治学教育にどのように役立つか(1)（2・完）：大東文化大学法学部政治学科の事例(2015-2022)を通して」『大東文化大学教職課程センター紀要』5号、7号、2022年、2024年をご覧ください

ください)。ですから、それをまとめる作業も、学生たちとともにおこなうことが自然だろうと思ったのです。

2024年度のゼミ生は、そのような私の仕事の一つに共感してくださった方々です。4名の皆さんと一緒に一年間の勉強ができたことはこの上ない喜びでした。



このゼミでは、福島第一原子力発電所の事故をめぐる映画・ドラマを三つ見ました。「Fukushima 50」、「太陽の蓋」、「The Days」の三つです。また、『福島第一原子力発電所事故の真実』を読みました。前田、川崎、新井は政治学インターンシップを通じて、齋藤は武田、北出紘大（ゼミ OB）、川上佳小吏（ゼミ OG）とともに特別見学を通じて、事故現場を見てきました。北出君、川上さんとは2024年3月に、台湾でも原発を見に行きましたので、とても思い出に残る視察でした。また、ゼミ OB の芹澤優仁君には、田中柊麻氏（同級生で友人）のインタビューに参加いただきました。震災

と原発事故を描いた漫画も読み、取材に挑戦しましたが、インタビューにまではこぎつけられず残念でした。2025 年度以降の課題にしたいと思います。それでも、政治的立場の異なる映像を三つ比較しながら見たことは、長年の取材を通じた NHK の著作の読解や現場視察に、深みを与える相乗効果があったように思います。良い勉強ができた一年でした。



ゼミ生の皆さんには、この一年の記憶を、ぜひ大学時代の思い出として、心のどこかに残してほしいと思います。一生に一度の学生生活で、私は、学生に何を学ぶべきなのか、どう学ぶべきなのかを伝えているつもりです。ゼミに入るということは、友人（今回は新しくできた他大の友人を含めて）、そして先輩か

ら、どう学ばせてもらっているのかまで、学ぶことになります。ゼミでは最初は知らない学生と、いやいやながらの共同作業をそこかしこでさせられたかもしれません。しかし、後年、それによって皆さんの世界が一回り広がったことを実感してくれるはずです。

この一年の活動を通して、皆さんが、戦後 80 年を迎えてさらに大きな変動を迎えるであろうこの時代を、他の人よりもたくましく、よりよく生きていくヒントをみつけてくれたなら、日本と世界に、私は良い若者を送り出したと胸を張って言えます。



本報告書が、皆さんの将来において、ささやかであっても何かを与えるよすがとなればうれしく思います。

2025 年 3 月 22 日

春の気配を感じる秋津の拙宅にて

武田 知己

目次

はじめに		武田 知己
1. 田中柊麻氏インタビュー記録（一部紹介）	聞き手：	武田 知己 芹澤 優仁
	編集：	前田 篤利 川崎 直輝
2. 大川勝正氏インタビュー記録（一部紹介）	聞き手：	武田 知己 新井 優佳 齋藤 帆伽
	写真・協力	北出 紘大 川上佳小吏
	編集：	新井 優佳 齋藤 帆伽
3. ギャラリー（9 月政治学インターンシップ、11 月福島視察）		
おわりに：ゼミ長から一言		川崎 直輝

※ 1, 2 のインタビュー記録は、「新・武田知己の日本政治研究の部屋」で準備でき次第公開します。ご了承ください。

=====

1. 田中柊麻氏インタビュー記録（表紙のみ）

聞き手： 武田 知己

芹澤 優仁

編集： 前田 篤利

川崎 直輝

=====



田中柊麻（たなか しゅうま）さんは、石川県小松市出身。2023年3月大東文化大学法学部政治学科を卒業し、石川県で小学校の非常勤教員を務めていた2024年1月1日、能登半島地震が発生する。その時のことを、語ってもらいました（TT）。

取材日時：2024年8月12日（月曜日）

場所：大東文化大学板橋校舎 2-333 研究室

聞き手：武田 知己（大東文化大学法学部教授）、芹澤 優仁（同文学研究科修士課程）

目次

- ・ 2024年1月1日能登大地震発生
- ・ 車でしか帰れない
- ・ 生徒の安否確認をどうやるのか
- ・ 小松に戻って
- ・ 穴水町の様子
- ・ 自宅半壊の様子
- ・ 小松に戻って
- ・ 生徒との連絡開始
- ・ 学校の再開
- ・ 再開した学校の様子
- ・ 地震発生のタイミング
- ・ 報道されない被害
- ・ 避難所からの出勤

- ・被災後半年の変化
- ・目で見た復興の様子
- ・非常時における心がけ
- ・地震からの教訓
- ・北陸という共同意識

2024 年 1 月 1 日能登大地震発生

武田 最初に自己紹介をお願いしますか。

田中 はい。2023 年に大東文化大学法学部政治学科を卒業しました田中柊麻と申します。

よろしくお願いします。

武田 よろしく申し上げます。まず、地震発生当時の様子について教えてください。

田中 2024 年 1 月 1 日の能登半島地震発災当時は石川県の輪島市、大谷小学校というところで勤務しておりました。現在ちょっと休職しているのですが、また 9 月から小松の小学校で働くことになっています。ただ、地震発生時はお正月だったので、埼玉に帰省をしていました。

武田 1 月 1 日でしたね。

田中 はい、1 月 1 日に埼玉に帰省をしていました。皆さんと変わらないように初詣に行って、お雑煮とおせちを食べていて、本当に普通の正月を送っていました。そんな中で 16 時 10 分の時には、川越のある商業施設のエレベーターの中において、エレベーターが 2 階しかない建物なのですが、2 階に上がった瞬間に緊急地震速報がなって、近くかなと思って携帯をみたら、能登半島で震度 7 かな（**武田** マグニチュード 7.6 ですね）、震度 7 っていうのがまず飛び込んできて、大丈夫かなっていうのを思った時に、川越もちょっと、くら～と揺れるぐらいにはなっていて、これはここまで届くとなるとかなり大きな地震なんじゃないかなと思って。商業施設で待ち合わせをしていた知り合いに、新年の挨拶をして、すぐに家に帰ったら、テレビで町の空撮の映像がながれていて、道路が割れていたりだとか、あるいは家が倒れているって映像が流れてきていて、これは帰らないとまずいかなっていうことになって、1 月の 3 日までの予定だったのを 1 月の 2 日の朝すぐに出て、石川に帰りました。

武田 なるほど。

田中 で、その道中なのですが、本来であれば新潟方面に抜けて北陸道経由で行き来するのですが。

武田 車ですか？

田中 そうです、車です。車で北陸道経由で、行き来するのが我が家の定番ルートなんですけれども、当日は地震の影響で、新潟方面、新潟と富山の間の北陸自動車道で亀裂が入ったりとか、一部崩壊っていう情報も出ていたので、途中まで行って、たしか群馬か新潟手前ぐらいまで、そう、長野を過ぎたぐらいまでは高速で行って、そこから下道で行こうとしたんですけども、北陸を通ってる国道8号線というのも土砂崩れが新潟県内で起きていて、通れなかったんで、1月1日の夜に、山梨から中央道抜けて、静岡、愛知を通して、滋賀、福井を北上して滋賀と福井から北陸道に入っていくっていうような形で、普段は通らない山梨から太平洋側を抜けて、帰るという。

(中略)

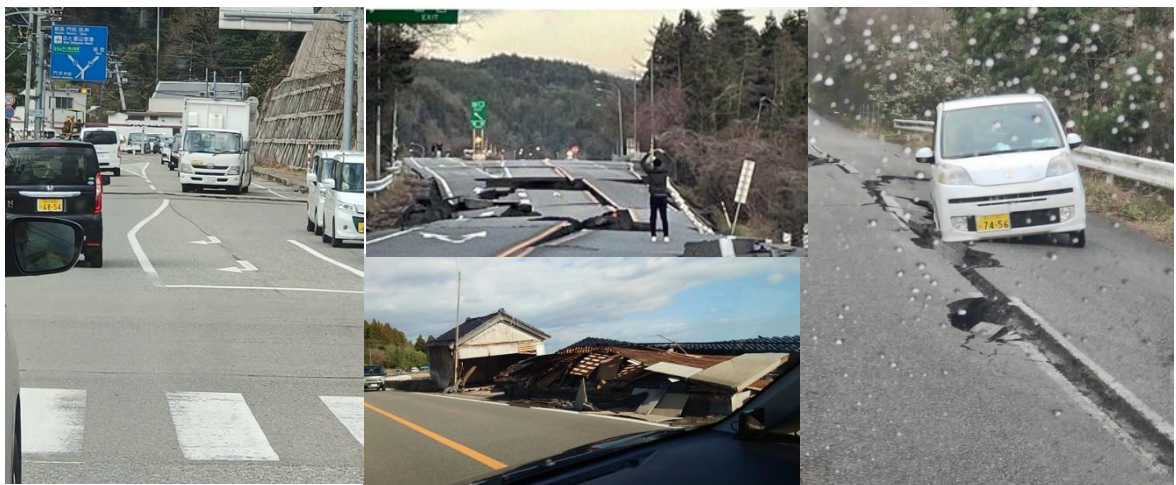
田中 で、メディアのあるあるなのですが、火のあるところにやはりメディア行くんですよ。ヘリコプターでそこに行って報道するという…。ここに写真で出ている珠洲市、能登町、穴水町、七尾市の被害というのは、最初のうちほとんどやはり出てなかったんですよ。一緒に働いている先生たちがやはり能登の先生たちなので、連絡の取れる先生とはすぐに連絡を取り合っていました。

武田 その連絡を取り合っていたというのは、帰ってからですか？

田中 いや、帰る途中で、1月1日からずっと取り合っていました。

武田 1月1日からということですが、連絡はついてたんですか？

田中 当時15、6人の先生たちと一緒に働いていたんですが、震災当時に連絡がついたのは校長先生を含めて4人だけでした。



写真：田中さんが自宅のある穴水町に向かう道中（田中氏提供）

武田 それは避難していたからですか？

田中 避難していたのもありますし。電波が通じるところにいたからですね。穴水町に住んでる先生が4人いたので、僕の自宅のすぐ上の穴水高校が避難所になってたんですよ。

武田 なるほど。 (以下、本文は、「新・武田知己の日本政治研究の部屋」で公開)

=====

2. 大川勝正氏インタビュー記録（表紙のみ）	聞き手：	武田 知己
		新井 優佳
		齋藤 帆伽
	写真・協力	北出 紘大
		川上佳小吏
	編集：	新井 優佳
		齋藤 帆伽

=====



大川勝正（おおかわ かつまさ）さんは、福島県浜通りで魚店を経営されていらっしゃいます。2011年3月11日の震災から現在まで、しばしばメディアの取材に答えられており、私たちもそういった記事を読んで、インタビューを計画しました。大川さんには、お忙しい中、お時間を頂き、お店の二階の事務所で、この13年のこと、最近の処理水放出のことなどについて、お話を伺いました（TT）。

取材日時：2024年11月30日（土曜日）

場所：大川魚店（福島県いわき市四倉町）

聞き手：新井優佳（大東文化大学法学部3年。Zoomで参加）、齋藤帆伽（同左 現地にて取材）、北出紘大（武田ゼミ0B）、川上佳小吏（武田ゼミ0G）、武田知己（大東文化大学法学部教授）

目次

- ・いわきの魚たち
- ・イオン入社から家業を継ぐまで

- ・ 2011 年 3 月 11 日のこと
- ・ 福島原子力発電所の 2 度の爆発
- ・ いわきに戻って
- ・ 再開後の工夫
- ・ 腹を決める
- ・ 試験操業時の決意
- ・ 自衛隊への印象
- ・ 高島屋物産展での経験
- ・ いわきの魚を売るために
- ・ 福島県内シフト
- ・ タンクに溜まる水をみながら
- ・ 2024 年夏の処理水放出
- ・ 近隣諸国の反応
- ・ 知らないで買ってもらう方がいい
- ・ 処理水放出後の心境
- ・ 細野豪志さんについて
- ・ 県外の人への要望

いわきの魚たち

武田 [スマートフォンの画面を見ながら] 今映っている新井〔優佳〕さん、今日どうしても来れなくて。遠隔で参加します。新井さん、自己紹介をお願いします。

新井 大学文化大学 3 年の新井優佳です。よろしくお願いします。

武田 学生から質問させていただこうと思います。あんまりお互いに緊張しないようにできればと思います。よろしくお願いします。

齋藤 大東文化大学の齋藤と申します。よろしくお願いします。

大川 お願いします。

齋藤 それでは、質問を始めさせていただきます。まず、いわきの周辺の海ではどのようなお魚を取ることができるのですか。

大川 この辺ですと、本当に近場だと、やっぱりカレイ類。ヒラメとか。あと有名なのはメヒカリっていう魚。メジャーなところはそんな感じかな。あと、アンコウとか。

カレイって言ってもいっぱい種類があって、マコガレイ、ヤナギガレイ、ナメタガレイ。地域地域で、カレイでも好みが違っていて、四倉とか、北目だとマコガレイ、コガレイ、ホンマコガレイとか。あと、ニクモチガレイっていうのが結構好まれていますね。いわきの南の方に行くと、ムシガレイっていうのが好きだったり。いわきでも、南の方に行くと、茨城寄りっていうか、関東寄りの魚に近い感じです。小名浜っていうか、いわきの南部の方にもお店があるんですけど、仕入れを変えています。

武田 この辺の海ってこう、2つの潮がこう混じっていて……

大川 そうなんです。このあたりは潮目の海なんです。親潮と黒潮。潮目の海って、プランクトンとか、こう、合わさっていいんだみたいな話もありますね。それもあるんですけど、結構、海底が良くて、底魚って言って海底にいる魚が多いですね。

武田 なるほど。

大川 水中の真ん中じゃなくて、結構地面にいる、海底にいる系。そこらへんがいわきのものみたいな感じですね。いわきっぽい。常磐ものって言われます。

イオン入社から家業を継ぐまで



齋藤 ご経歴を見ると、イオンを退職されて、今魚屋さんをされているとのことですが、どのような経緯でそうなったのでしょうか

大川 これはですね、皆さんも大学3年生だと思うんですけど就職活動するじゃないですか。僕も大学行ったのも、そもそも

最初は、別に魚屋さんやるとも全然思っていなくて。僕、自分で起業したいなと思っていて。

齋藤 起業……

大川 はい。はい。起業するからにはなんかそれなりに大学行った方がいいかなみたいな、結構ふわっとした感じで大学行って。東京の大学行ってたんですけど、そこで何屋さんになろうかなと思って、考えながら学生時代過ごすみたいな感じでいたんです。最初のイメージとしては、食品業界がいいかなっていうのがあって。アルバイトとか学生がね、すぐできそうな感じで食品業界だったというのと、あとは、最初イメージしてたのは、嗜好品を取り扱う、商社みたいな感じの会社をやろうかなと思ったんです。

齋藤 お魚ではなかったんですね

大川 その頃はね、インターネットもそんな無く大変だったですよ。嗜好品っていうと結構僕そういう、お酒とかタバコとか、チョコレートとか、スパイスとか、そういうの結構好きだったので、そういうのがいいかなと思ってたんですけど、色々考えていくうちに、なかなか起業するのはリスクだなと思って。こんなこと考えてたら、あっ、うちの実家は食品会社だっていうことに気がついて。魚屋さんだったの。その時初めて魚っていうのに真面目に向き合ったっていうかね。

ああ魚ね、と思って。魚もいっぱい種類あって楽しそうだなと思って。じゃ、家業をやるかっていうことになったんですけど、その場合、僕は物の売り方を知らない。ま

ず、物を売るとか、物流とか、人数とか、どうなっているんだろうと思って。そんな感じのところは、就活パパパっとして、イオンにさくっと決まったんで、それで終わりって感じだったんですけど。

イオンさんで、要するに物の売り方、勉強っていうか、そういう感じで入ったんですよ。イオンに入ると、結構勉強させられるんですよ。いろんなものの売り方。あとは、イオンって結構、何百人もパートさん使うんで、労働法とか、結構最初の1、2年で、ガーって詰め込みで勉強させられるんですけど。いや、なんか、勉強させてもらって、給料もらえるなんていいなと思って。ていう感じですかね。

武田 そうだったんですね。

大川 でも僕、ちっちゃい頃から魚屋見てるんで、魚を継ぐからには結構若くしてやった方がいいかなと思っていて。やっぱり包丁使うのって、多分ちょっと年取ってからとか、ちょっとからだに苦勞するような気が肌で感じていたので、20代ぐらいのうちに戻ろうかなっていうところと、あとはイオンの中でも試験があるんですよ。何年かごとに。(中略)

2011年3月11日のこと

齋藤 2011年の3月11日、災害発生当日は何をされていましたか。

大川 ちょうどね、ここの店にいて。まさにここの、この〔大川魚店の二階の〕隣の部屋、事務所で、事務作業をしていた。普通にお昼休憩終わって、2時40何分でしたね、昼休憩終わって帰ってきて、さあ午後の部の仕事に取っかかったぐらいの時に。

武田 だいぶ揺れたんですか。

大川 すごく揺れました。信じられないぐらい。僕の席の後ろに大きい資料用の棚があるんですけど。そこにも資料がいっぱい乗ってて、重いんですけど、それがもう、ぐわんぐわん揺れて、大変だ、棚に潰されると思って、まず棚を抑えてるんですけど。そうすると、事務所にあるパソコンとかが、バタバタバタって、もう全部、全部崩れて。パソコンも助けに行きたいけど、俺も危ないみたいな感じでした。

武田 長かったんですよ。あれ

大川 長いです。船酔いとか車酔いじゃないですけど、僕、結構車酔いとかするタイプなんで、結構くらくらとして、気持ち悪くなるぐらいで。長くて終わらないんですよ。

齋藤 大変でしたね。

武田 津波はどうですか。

大川 津波も来ましたね。ここの店も1回は膝ぐらいまでバーっと来てしまって

武田 魚とか商品はダメだったんですね

大川 そうですね。それで、店のショーケースですね。売り場のはもう全部塩使っちゃったんで、ダメで。ただ、幸いなことに、室外機というのがあるんですけど、それはこの2階にあったんですよ。なので側だけ変えて。あと、冷房とかこっちの室内に繋げ

れば動くという感じだったので、それはこのケースの側だけ変えればよかったので。

(以下、本文は、「新・武田知己の日本政治研究の部屋」で公開)

=====

3. ギャラリー (9 月政治学インターンシップ、11 月福島視察) 武田 知己

=====



2024 年度は 2 回視察しました
ね。どちらも一つとも楽しか
ったです。

=====

おわりに：ゼミ長から

=====

前田 篤利

ゼミ長の川崎です。

私たちのゼミでは福島第一原発事故を中心に東日本大震災、福島について映画、本、漫画で学びました。その後実際に現地に行くことで更に深い学びを得ることが出来ました。

3、4 年が混在するゼミでしたが、1 年間を通じて信頼関係を築くと同時にメンバー間で興味を持ったことをテーマにして学ぶことが出来き、ゼミの目標についても達成出来たと思っております。

このゼミでしか体験出来ないことを沢山させて頂きました。福島ゼミで過ごした思い出は私の宝です。

最後になりますが大川勝正様を始めとするお世話になった皆様、武田教授、福島ゼミのメンバーに心より感謝申し上げます。



発行日：2025 年 3 月 24 日

編集：武田 知己・川崎 直輝

発行者：武田知己ゼミナール

住所：〒355-8501 埼玉県東松

山市岩殿 560 大東文化大学東

松山校舎 4 号館 308 武田知己

研究室 ttakeda@ic.daito.ac.jp